

日本アメリカ史学会 第13回（通算第41回）年次大会 プログラム

日時：2016年9月17日（土）、18日（日）

場所：明治大学駿河台キャンパス リバティタワー9階（17日）、10階（18日）

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

連絡先：大津留（北川）智恵子 (ckotsuru(a)kansai-u.ac.jp)

大会第1日 9月17日（土）

幹事会 12:00～13:00 （1093教室）

シンポジウム A（一般公開）（1093教室）14:00～17:30

「文化論的転回とアメリカ史——『転回』以後を考える」

【趣旨】

文化史には長い伝統があるが、1990年代の「文化論的転回」以降、とくに隆盛を迎えている。文化論的転回は多面的で複雑な変化だが、特徴の一つは文化の定義を拡大したことにある。古典的な高級文化、社会史が論じた民衆文化を超えてよりポピュラーなものへ、かたちあるものだけでなく行為や習慣へ、一国にとどまらないグローバルな権力や資本へ、文字や視覚以外の感覚へと文化史の射程は広がった。次に、現代思想や批評理論による言語論的転回に影響を受け、文化は社会制度や下部構造の反映ではなく、逆に文化を通して現実が構築されると考えるようになった。また、歴史学内外の様々な分野との交差から、多様なテーマについて学際的なアプローチが取られるようになった。

こうした変化と達成の一方で、文化論的転回には批判もつきまとう。「文化主義 (culturalism)」と呼ばれるように文化への傾斜が強まり、あらゆるものが文化となることで、文化の境界や文化史の意義は曖昧になった。構築主義と文化の自律性の主張は、文化を社会的基盤や政治性から切り離し、長い歴史を俯瞰する巨大な視点を置き去りにしたとも言われる。近年では「転回」の終わりの指摘もあるが、はたして文化論的転回は何をもたらしたのか、それは文化の理解をどのように変えたのか、まだもし問題点があるとしたら文化史はそれにどのように答えるのだろうか。

本シンポジウムは、文化論的転回を振り返り、その意義と課題を踏まえた上で、転回以後の歴史学を考える試みである。社会史がマイノリティを、新しい文化史が象徴的な事件を論じたのに対し、文化論的転回はしばしばよりありふれた、日常的な行為の実践やモノの消費の意味を考えてきた。モノは単なる客体にとどまらず、人間がそれを使うと同時にモノが人を形づくるように、あるいはパフォーマンスが主体の表出ではなく、主体を形成するプロセスであるように、文化の詩学から政治学への転換は人と現実が取り結ぶ関係性の再考を要求する。本シンポジウムでは、転回のヒストリオグラフィーを総括するとともに、現在の文化史の問題意識を共有することで、構築物と現実の、文化と社会の、テキストとコンテクストの間を架橋する議論を期待したい。

報告： 松原宏之（立教大学）「文化史は終わったのか」

—カルチュラル・ターン後のアメリカ史—

野村奈央（埼玉大学）「相互扶助としてのホームパーティ」

—アーミッシュ・コミュニティにおける文化の実践と

宗教アイデンティティの形成」

小林剛（関西大学） 「歴歴史という檻と視ること

—美術史からヴィジュアル・カルチャーへ」

コメント：生井英考（立教大学）

丸山雄生（一橋大学）

司会：丸山雄生

総会（1093 教室） 17:35～18:20

懇親会 18:30～20:30

アカデミーコモン 1 階「カフェ・パンセ」

大会第 2 日 9 月 18 日（日）

自由論題 9:20～12:00（1105 教室）（各報告 25 分、質疑 10 分）

司会：村田桂一（一橋大学・院）・野口久美子（明治学院大学）

報告：

藤田怜史（明治大学） 9：25～10：00

「エノラ・ゲイ論争に見る歴史展示の政治性—国立航空宇宙博物館の妥協と抵抗—」

倉林直子（川村学園女子大学） 10：05～10：40

「歌舞伎のアメリカ初公演と日米関係」

佐藤夏樹（京都大学） 10：45～11：20

『『ヒスパニック』と外交—1980 年代 LULAC の『外交』への視線』

賀川真理（阪南大学） 11：25～12：00

「第二次世界大戦下における日系ラテンアメリカ人の強制送還に関する一考察

—なぜ彼らがアメリカに送還されなければならなかったのか」

昼休み 12：00～13：00

シンポジウム B 13:00～16:00（1105 教室）

「グローバル化する世界とアクティヴィズム」

【趣旨】

21 世紀初頭のアメリカは、「新たなアクティヴィズムの時代」として位置づけられるだろう。「ティーパーティー」、「オキュパイウォールストリート」「ブラックライヴスマター」など、担い手や立場、目的におけるこうした多様性が新たなアクティヴィズムの特徴といえる。さらに強調しておかなければならないのは、グローバルなひろがりである。インターネット技術の飛躍的向上により日常生活の一部となったソーシャル・ネットワーキング・サービスが、この基盤となったことは言を俟たないだろう。しかしながら、グローバル化によって起こるアクティヴィズムは、この数十年に突如として起こった現象ではない。たとえば、古くは 15 世紀以降、アメリカス・アフリカ・アジアはヨーロッパ人による「進出」と移住・植民地化を通じて徐々に接続され、ヨーロッパ世界／資本主義経済へと統合されていった。その過程において、国民国家や人種のような新しい概念が創出され社会を編成していくが、アクティヴィズムは、このプロセスのなかで絶えず登場しそれぞ

れの時代を規定しつつ、またこのプロセスに対して再帰的な影響を及ぼしてきた。過去の中に、各時代に特有のグローバルなアクティヴィズムを発見できるのである。

本シンポジウムは以上の点を踏まえて、アメリカの歴史的展開の中で各時代にいかなるアクティヴィズムが登場し、沈静していったのかを「グローバル化」をキーワードとし再考する。各時代には固有の「グローバル化」現象があり、またそうした状況に応答するアクティヴィズムも一様ではない。本シンポジウムの目的は、グローバル化とアクティヴィズムの関係をその意味内容から再考することで、アメリカの現在を歴史的観点から相対化し、より深く理解することである。この作業を通じて、ある歴史的状況に特有のアクティヴィズムの「新しさ」とは何か、そのアクティヴィズムを生んだ「グローバル化」がいかなるものであったのかを検討するのが、本シンポジウムの目標である。

グローバル化とアクティヴィズムを問うことは、日本における「歴史学のアクチュアリティ」を再検討することにもつながるであろう。2015年に「安保法案」に対する抗議の運動が若者を中心に勃興した。このことは、日本においても新しいアクティヴィズムの意味を歴史に照らして考察することが喫緊の課題であることを示していよう。アメリカにおけるアクティヴィズム史の再検討は、日本におけるアクティヴィズムの現在と未来を考察するうえでも有益な作業となるだろう。

- 報告： 森丈夫（福岡大学）「帝国の戦争／決壊する植民地のアクティヴィズム
—パクストンボーイズの反乱とインディアン虐殺のコンテクスト—」
牧田義也（立命館大学）「越境するアクティヴィズム
—20世紀前半アジア太平洋地域における国際赤十字運動—」
村田勝幸（北海道大学）「アメリカ黒人とパレスティニアンの連帯に関する一考察
—エリック・ガーナー事件（2014年7月）とマイケル・ブラウン事件
（2014年8月）をめぐって—」

コメント： 坂下史子（立命館大学）

司会： 宮田伊知郎（埼玉大学）

シンポジウム C 13:00～16:00 （1106 教室）

「アメリカ占領下日本におけるセクシュアリティ統制の遺産」

【趣旨】

本シンポジウムは、占領期の日米関係をセクシュアリティの統制という視点から検討する。また、占領下日本における日米の性的接触が、アメリカ国内のジェンダー・セクシュアリティ・人種の秩序や、その後のアメリカの軍事政策に与えた影響を考える。アメリカ占領下の日本に限らず、占領には恋愛から売買春、レイプにいたるまで、占領者／被占領者の間に様々なレベルの性的接触が伴った。占領軍にとっても、被占領者にとっても、性的接触とその帰結をコントロールする政策を画定する必要があった。占領者／被占領者が取り結ぶ性的関係や親密性は、「良好な占領関係」を築くための不可欠な道具であった一方で、占領者／被占領者の境界線を曖昧にする可能性も秘めていたからだ。そのため、占領期から占領終了直後にかけての日本では、優生保護法や売春防止法といった、セクシュアリティを統制する法律が「日米合作」で制定される。これらの法律は、今日に至るまで日本の性規範に影響を与えてきた。

近年、占領地における米軍兵士の性を扱った歴史研究が増えている。これらの研究は、軍事政策と性の不可分な関係を明らかにするとともに、アメリカによる他国への軍事介入と占

領が「民主主義」と「女性解放」をもたらすという物語が、いかに誤ったものであるのかを証明している。先行研究は、「成功例」と語られ続けるアメリカによる日本占領についても、セクシュアリティの観点からすれば、多くの限界があることを示している。

本シンポジウムは、売買春対策、人口政策、教育、移民政策など様々な位相から、アメリカ占領下日本におけるセクシュアリティ統制の特質を総合的に考察する。軍の管理売春を公式に禁じるアメリカは、いかにして「慰安所」や基地周辺の売買春を管理し、「パンパン」と見なされた女性たちに「キャッチ（検挙）」と呼ばれる暴力を振るったのか。占領軍は日本の人口管理にどのように関与したのか。占領軍兵士と日本人女性との間に生まれた「混血児」と呼ばれた子どもたちに、いかなる教育実践が施されたのか。アメリカに移住した「戦争花嫁」や「混血児」たちは、アメリカの移民政策や人種政策をどのような変化をもたらしたのか。本シンポジウムは、占領期日本におけるセクシュアリティの統制を様々な角度から検証することで、アメリカが世界各地で軍事的プレゼンスを確立するうえで行ったセクシュアリティ統制が、当該地域だけでなくアメリカ本国にも与えた影響を明らかにする。

報告：平井和子（一橋大学・講） 「占領とセクシュアリティ統制—RAA・「特殊慰安所」、
基地売買春の有りようから—」

上田誠二（首都大学東京・講）『「混血児」たちの生存・教育・労働』

ルーシー・クラフト（フリージャーナリスト）

映画『七転び八起き—アメリカへ渡った戦争花嫁物語』

コメント：豊田真穂（早稲田大学）

司会： 後藤千織（青山学院女子短期大学）